（一般情報）

食卓に届く２年前からしっかりチェック

千葉県農林総合研究センター　令和２年９月７日発

農林総合研究センター成東育成地（以下、当育成地）では、千葉県の水稲品種のおおもとの種子である「原種」を生産しています。この「原種」をもとに、翌年には「種子」が生産され、その翌年にはその「種子」から県内の一般農家が「お米」を生産します。つまり、当育成地で生産された「原種」は、２年かけて食卓に並ぶ「ご飯」になります。この「原種」や「種子」は他の品種と混ざらないように、水田の中に入り、全ての稲を何度も確認して、本来の品種特性と異なる稲の抜き取りや品種毎に使用する機械を替える等、細心の注意を払い、生産しています。８月中旬から収穫作業が始まった「原種」の生産量は、今年度デビューの新品種「粒すけ」を含めて７品種・計 13ｔを予定しています。

当育成地では引き続き、千葉県稲作の根幹を支えるため、優良な水稲の原種の安定生産に取り組みます。

少しでも異なる株は抜き取り

コンバインでの収穫作業の様子